

Chapter 3 English as a Global Language

Sandra Lee McKay

発表の構成

- 1) 著者情報
- 2) 本論文の構成
- 3) 本論文の要約
- 4) 考察
- 5) 参考文献
- 6) 追加（ディスカッションの内容まとめ）

【おねがい】

このレジュメは、東京学芸大学大学院国語教育専攻日本語教育コースの授業「日本語教育方法論演習」（授業担当者：南浦涼介）での大学院生で取り扱った、Hinkel, E. (Ed.) 2017. *Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning*. の発表のレジュメです。教育的価値、資料的価値としてウェブでの掲載を行っておりますが、いわゆる「論文」ではありませんので、論文等への引用や掲載は固くお断りいたします。また、分析対象の著作権は著作者、資料文書の著作権は発表者に記しますので、無断転載はご遠慮ください。質問については、東京学芸大学南浦研究室 (<http://www.u-gakugei.ac.jp/~minalabo/index.html>) までお願いいたします。

（1）著者情報

氏名 Sandra Lee McKay

現職 San Francisco State 大学の名誉教授（Professor Emeritus）

専門分野 社会言語学、国際言語としての英語、第二言語教授法

（Sociolinguistics, English as an International Language, and second language pedagogy.）

著作 ①『Teaching English Overseas : An Introduction』（1992）Oxford 大学出版

②『Teaching English as an International Language : Rethinking Goals and Approaches』（2002）Oxford 大学出版

③『New Immigrants in the US : Readings for Second Language Educators』（2000）Cambridge 大学出版

④『Sociolinguistics and Language Teaching』（1996）Cambridge 大学出版 などである

（2）本論文の構成

番号	タイトル	日本語訳	解釈
1	Defining Paradigms	本論文の定義（入門）	定義
1.1	World Englishes	ワールドイングリッシュ（世界的英語）	従来の英語教育を広げる主な観点
1.2	English as a Lingua Franca	共通言語としての英語	
1.3	Linguistic Imperialism	語学的帝政	
1.4	Hybridity	多言語交雑性	
2.1	The Sociolinguistic of Globalization	グローバル化の社会言語学	異文化交流社会の現象によって、従来の学習観点の工夫すべき点の新たな観点
2.2	The Unsustainability of Native Speakerism	母語話者主義の不安定	
2.3	A Plurality of Norms	複数の基準	
2.4	Increasing Emphasis on Pragmatics	語用論の強調上達	
2.5	The Localization of Pedagogy	教授法の現地化	
3	Future Directions/Needed Research	今後の課題・要求研究	今後の課題

キーワード：

語学的 (linguistic)、異文化交流 (cross cultural exchange)、言語的な「財」 (resources)、教育哲学 (pedagogy)

考えましょう！

- ① 皆さんが知っている英語の教授法は何か。
- ② その様々な教授法は日本語教育に導入しようとすれば、どんな形になるのか。

(3) 本論文の要約

本論文の目的

- ① 英語を世界的言語にする為、英語の言語的構成を分析し、発展・工夫方法を探っていく。
- ② 国民の移動・避難の傾向が高くなった現在には、英語を共通語として世界の人々の掛け橋になる為、第二言語取得としての教授法を工夫する。
- ③ 本論文ではまず、現在扱われている英語を広げる主な観点を紹介し、それを工夫する為、現在の社会にあう選択的教授法を紹介していく。

1 Defining Paradigms (本論文の定義・入門)

現在、英語を広げるため様々な学習観点が世界的に実施されている。例えば、World Englishes、English as a Lingua Franca、Linguistic Imperialism、Hybridity などである。だが、それらの観点は移住による多言語多文化交流(cross-border exchange) 現在社会には適切だと言い難い。

現在の人々の異文化交流は英語で行われるだけでなく、その移動目的地の言語を主にされているという。例えば、ブラジル人が日本に移住し、日常生活の言語は日本語になる等である。

今後、英語を異文化のコミュニティの共通語として広げ、英語の教授法のあり方を明らかにするため、様々な工夫点が存在している。

1.1 World Englishes (ワールドイングリッシュ (世界的英語))

主な研究者：Braj Kachru

主な観点：英語を扱われている国は3 グループ分けられる。

それは Inner Circle：英語圏の国 (例：アメリカ、イギリス、カナダ等)

Outer Circle：英語を一つの公用語として (例：フィリピン、シンガポール、

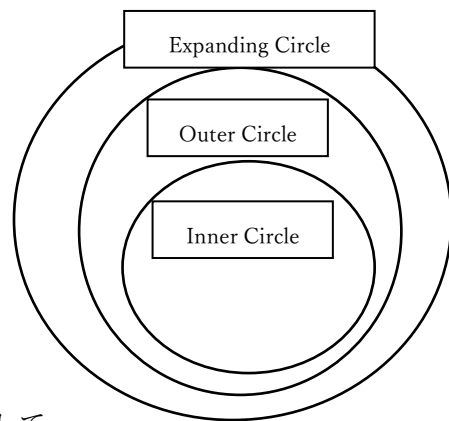
インド等)、Expanding Circle：英語が外国語として学習される国 (例：日本、韓国、タイ等)

World Englishes は Outer Circle の国で一番多く発展されている。外来語としてもう一つの公用語の単語や、文化の影響で英語の新しい単語・表現が発達されているからである。この観点は Outer と Expanding の国で扱われる英語のあり方を Inner の国の英語 (標準英語) に挑戦するという主な概念がある。

挑戦対象としては様々あり、例えば、英語の教授法、新しい外来語、文法、音声制度など。

英語は「英語圏の母語話者のもの」ではなく、「世界の人間」のものであるため、皆は工夫する権利を持つ。

課題：World Englishes はまだ英語の使用が他の言語に対してどんな影響 (政経力など) を与えるのかに関して見られていない。



1.2 English as a Lingua Franca (共通語としての英語)

主な研究者：Firth

主な概念：背景が異なり、異文化の人のコミュニケーションで扱われている英語の使用に関する研究

Lingua Franca は異文化の人のお互いの母語でない「共通言語(Contact Language)」という定義

この観点では英語母語話者の英語使用法より、英語の第二言語としての指導を中心にする。

英語話者 (English speaker) のコミュニケーション上の問題を解決する為の方法である。

課題：core features of ELF という主な概念があり、それは決まったパターンで学習されると、学習者の能力が制限される可能性がある。また WE のように英語使用による他の言語に対しての影響について触られていない。

1.3 Linguistic Imperialism (語学的帝政)

主な研究者：Phillipson

概念：英語の言語学的力が存在あり、Phillipson の定義では「語学的帝政(linguistic imperialism)」である。

英語が話されている国は英語の植民地として暗喩され、その国では英語指導に対しての「誤信」が存在する。また、各誤信は「失敗」をもたらす。それは、

- ① 英語は一番良い指導される言語である。→英語を最優先すべき言語であるという失敗
- ② 一番良い英語の先生は英語母語話者である。→母語話者の先生に関する失敗
- ③ 英語はできるだけ早い段階で学習される方が良い。→早い段階の英語学習スタートの失敗
- ④ 英語は広く指導されればされるほど良い。→英語の最高レベル学習の失敗
- ⑤ 他の言語が使用していくと、英語の基準が悪くなる。→ネガティブな英語学習の失敗

Phillipson が存在している誤信を解決する為、様々な英語学習のクラス活動法や英語指導の在り方を提案している。

課題：Phillipson が学習者の練習活動に大切にしないと議論されている。また、今までの英語学習者の中、強制され仕方なく勉強した人がもちろんいるが、自発的に勉強にした学習者もいるのではないかと議論されている。

1.4 Hybridity (多文化交雑性)

主な研究者：Pennycook

概念：バイリンガルの人のお互いの母語・文化と英語・文化の合わせ、言語を使用する。

英語は現在の異文化交換 (cross cultural exchange) の時代（でただ使用される一つの言語だけである。英語・英語的文化の他の言語・文化を大切にすべきである。

課題：Hybridity の定義についての議論があった。Rubdy and Alsagoff(2014)により、「Hybridity」のコンセプトに関する疑問を提案した。それは①Hybrid の定義を判断することが難しい。②Hybridity の概念では違う 2 つの言語がはっきり別々存在すると議論された。③言語的な力や言語的な不平等に関して触れられていないと判断された。

◎以上の英語学習の観点から発見された弱点に対しては Kubota (2012) により、現在の異文化交換 (cross cultural exchange) 向けの学習法の 3 条件が提案された。それは

- ①学習者は民族・経済などの背景が言語学習・指導への影響を知るため、促されるべきである。
- ②学習者が各面の背景を知る必要があり、オープン的な姿勢 (open attitude) を持つべきである。
- ③コミュニケーション能力を発達する為、身振り、アイコンタクト、説明のシンプル化なども知るべきである。

また、それらの弱点を解決するため、様々な傾向が発展された。本論では5つの分野について紹介していく。それは The Sociolinguistic of Globalization、The Unsustainability of Native Speakerism、A Plurality of Norms、Increasing Emphasis on Pragmatics、及び The Localization of Pedagogy である。

2.1 The Sociolinguistic of Globalization (グローバル化の社会言語学)

主な研究者：Blommaert

現代英語は人の社会身分の上達の一つ方法 (mobility) としてよく扱われている。移住者が自分の言語能力を全力で新環境の雇用・日常生活面で英語を使用する。Blommaert がグローバル化の現在に適切で、社会身分の上達に対応できる言語学を要求する。

- 難民の人は日常面だけ英語を狭い範囲で使用する。
- イメージは意味よりパワーがある。(東京のチョコレート会社のフランス語の名前の事例)
- 英語が選ばれたのは経済的で、ユニバーサルで、パワーがある。
- 英語のイメージは英語学習への影響が強い
- 教育・経済・ユニバーサルの条件で人の第二言語学習の成功とつながる。

Kachru(1986)：英語の学習は Aladin のラップみたいで、ビジネス・技術・旅行・科学の道を開いてやるという。

● 「mix language」：バイリンガルの概念より複雑であり、現代の言語使用の新しいモデルである。コミュニケーション上のジャンル、スタイル、トピックを中心に据える。主な概念は以下の通り。

- ① 人のコミュニケーションは言語使用ではなく、持っている「財 (resources)：本人の母語・文化・経験」を使う。
- ② 特定の言語的な「財」を言語的な信念と接続する。
- ③ 「財」を使用した影響・結果により、学習者の言語学習の成功率が変わっていく。
- ④ 学習者の「財」は人により変わっていく。すべての言語・経験の背景の「財」をその人のコミュニケーションで使われる。例えば、言語的な財、イメージの財、社会的文化の財など。

最近の研究者は、言語の先生が L2 学習者に隠されている財をコミュニケーションの活動で出させるため、サポートすべきと提案した。

2.2 The Unsustainability of Native Speakerism (母語話者主義の不安定)

● 言語の先生は絶対「母語話者」なのか？

本来の「母語話者」定義：家庭内で使用されるため、幼いころから英語を学習する。また/それとも、国の言語である。また、最初の学習言語、その言語の使用のプロになった人

現在の母語話者の定義のチェック質問+解答

- ① 母語話者になるとされるため、生まれてから家庭内でずっと英語を話さないといけないか？
→ (いいえ、現地人の本能 (native intuition) はその後で手配することができる)
 - ② あなたの家庭内で2言語を使用される場合、あなたは母語話者として認められるのか？
→ (はい、一番重要なのは現地人の本能 (native intuition) である)
 - ③ 英語母語話者になる場合、一生英語を使用する必要があるのか？
→ (はい、連続使用することは現地人の本能 (native intuition) が維持できる)
 - ④ あなたは大人になり、英語を一つだけの言語として使用し始めると、英語母語話者としてみとめられるか？
→ (現地人の本能 (native intuition) が身につければ、できる)
- Outer と Expanding Circle の英語母語話者の大体の共通点は「幼い頃から英語学習を始める」、「現地人の本能

レベルまで達成できる」、「自分のメインの言語としてよく使用できる」

●母語話者に対する「誤信」

- ①母語話者が第二言語学習者より能力が高い→教育不足の母語話者が第二言語学習者より評価が悪いことがある
- ②母語話者が母語の本能（native speaker intuition）を持つ→母語の本能の指摘が不明、「自然の言語使用」が練習可能
- ③母語話者が第二言語学習者より良い先生になる→教育不足・専門知識を持たない母語話者が上手く指導できない

2.3 A Plurality of Norms（複数的基準）

Standard English：理想な言語学習の目的とつながる基準に判断された言語のバリエーションである。

Standard English は外面（exonormatively）ではなく、内面（endonormatively：現場の決定）である。

英語の基準は一つではなく、違ってもそれは基準であると認められる。（2人の英語話者の会話の事例）

例えば、シンプルな英語（Local English）と共通英語（Universal English）

学習者が様々な英語のバリエーションになれるようにするのは言語先生の役割であるといわれる。

Wesbank の事例：アフリカ地方である。学習者が言語の基本知識の問題がいくつかある。例えば、①大文字の使い方、②動詞の活用、③アーティクルの使用、④スペリング、⑤ライティングのスタイル。

問題；Wesbank のところで貧困や教育の問題があり、学習者の背景も様々ある。だが、Blommaert（2010）によって、Wesbank の学習者の知識問題は大きな問題ではないという。その学習たちがその場の環境で作ったスタイルのため、教師はそれらの間違いが英語の「Center」と違い、その影響についても指摘してあげる位はいい。

2.4 Increasing Emphasis on Pragmatics（語用論の強調上達）

概念：コミュニケーション上で話し相手が英語の文法の知識のレベルが違う。それは表現・言葉遣いのセンスが違うことと同じである。

Firth(1996)により、話し相手がある程度のお互いの理解があったら、彼らが「Let it pass 理論（分からないけど、話を流す）」をする傾向がある。だが、ビジネス面のように正確性が要求されている場合では、Let it pass 理論を使わず、明らかになるまで聞き取る傾向があるという（B氏とH氏の事例を参考）。

Canagarajah（2007）によると、異文化交流の話し相手の間では「meaning(伝えたい意味)」と「usage(使用)」が「Form（形式）」より大切であるという。

●現在、英語話者は様々なバリエーションがあり、コミュニケーションの目的も違い、言語知識も違う。上手なコミュニケーションができる人はそれらの様々な場面で上手く調整できて、適切な表現やコミュニケーションの仕方ができるべき。

その能力は「Local Standard」なのか「Inner Circle Standard」なのか、現在はまだ論じられているが、その能力は今後、Outer も Expanding Circle の人々も知る必要があるという。

●Mckay(2011)により、英語学習のカリキュラムには以下のことを中心にすべきであるという。

- ①先生は学習者に語用論の間違いを細かく説明すべきである。
- ②コミュニケーションの技術、注意点、アドバイスである。例えば、ターンテークの管理など
- ③カリキュラムには環境・場・文化によって言葉遣いの基準が違っていくのかについて学習者に説明すべきである。
- ④学習者が言葉遣いの権利を持つべきであるが、先生がその使い方のリスク（誤解など）について学習者に説明

すべきである。

2.5 The Localization of Pedagogy (教育哲学の現地化)

主な研究者：Kumaradadivelu

Kumaradadivelu (2001) により、Pedagogy (教育哲学) の定義は「クラスの運営、教材、教具、評価」だけでなく、「第二言語学習に対する影響を与える歴史的・政治・社会的な経験」も含める。

●新規の Pedagogy (教授法) の定義は 3 P で表れる。

- ①Particularity (場所性)：現場なりのクラス運営を行う。各「場」では教師の目的、学習者の目的の達成、文脈、社会的な特徴があるため、その場なりの特定性を探っていくのは適切であるという。
- ②Practicability (実用性)：クラスの活動も理論の指導の運営は教師の次第である。教師が実習・練習のための教具の提供は大切なことである。教師が現場の問題が把握でき、情報分析ができ、一番適切な道が選ぶことができるからである。
- ③Possibility (可能性)：Pedagogy (教育哲学) はアフリカの基本的なリテラシーを発展する力と関係があるという仮説からである。教育哲学の作成は「学習・指導スタイル」だけでなく、「政治・経済・社会的な環境」ともかわっている。

●McKay and Brown(2016)により、英語学習の教育哲学 (Pedagogy) の主な 3 利益を提案された。

- ①教師と学習者が協力し、作られる bits of English (例えば、教材、学習法など)
- ②教師も学習者もクラスに持ってくる財 (resource)。例えば、遊び、言語的な財、ジェスチャーなど
- ③教師は学習者の言語学習目的を上達させる必要な「財」を提供すべき。

Future Directions/Needed Research (今後の課題・要求研究)

以下の通りの課題を今後研究すべきではないかと考えられ、まとめる。

- ①英語話者 (学習者) がどうやって自分を持っている全部の「財 (resources)」を運営し、異文化交流 (cross cultural exchange) の社会でうまくコミュニケーションがとれるのか。
- ②教師がどうやって学習者のニーズを分析する力を身につけるのか。また、学習者が持っている言語的な「財」を上手く活用できるように教師からの提供も大変大切だと考えられる。しかも、学習者が自分の目的を達成する為、まだ足りない「財」があるのか。あった場合、どうやって提供してあげればいいのか。
- ③特定の環境、特定の学習者のメンバーなどでの教材作成能力は学習者のニーズに合わせるため、現場の教師に要求されているという。

(4) 考察

①本 Chapter で紹介された様々な教育的観点・言語学的観点は日本語教育に導入しようとする、どんな形に実施できるのだろうか。

②英語教師は母語話者教師と非言語母語話者のメリットとデメリットが何か。日本語教育、中国語教育、スウェーデン語教育の場合、どうだろうか。

④『「言語」はその母語話者のものだけではなく、学習する人も工夫する権利を持つ』という言葉に対して、どう思うか。

③本論文からみると、現在の社会の言語学のニーズに対応する為、「基本的な文法や、発音、表現の正確」より、「語用論や、人間関係上のコミュニケーション、教授法」などの練習に集中されてきたという。他の言語教育の傾向がどうだろうか。

(5) 参考文献

Eli Hinkel (2017) 『Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning Vol.3』 Routledge 出版社

Wikipedia (2017) 「Sandra Lee McKay」、〈https://en.wikipedia.org/wiki/Sandra_Lee_McKay〉

2017 年 4 月 26 日アクセス

(6) 追加 (ディスカッションの内容まとめ)

2017 年 5 月 8 日の日本語教育方法論演習におけるディスカッションの内容まとめ

言語教師とはその言語の母語話者しか適切ではないのかについて様々な議論を取り上げられた。英語教育界の現代では母語話者の教師だけでなく、英語使用の Outer Circle の国の第二言語の教師数が世界的に認められ、増えているという（フィリピン人の教師やシンガポール人の教師など）。授業中で皆の意見交換からみると、第二言語の教師の数がまだ少ない日本語教育ではどんな可能性が上手く行けるのかに関して考える必要がある。

発表者の意見では日母語話者の日本語教師の能力が母語話者と比べ、短所も長所もあり、母語話者の教師と同じレベルで並べることができるだろう。日本語教育の第二言語教師の可能性を上達する為、その先生が専門分野と関わる資格を取ることも一つの方法だと考える。また、今までの母語話者帝国主義のような古い価値観に限られないように、非日本語母語話者の教師たちが勇気を持ち、挑戦していく姿が何より大切なものではないかと考えている。